

コロナでも活況

コロナの第3波が襲来。緊急宣言が出されたのが昨年の3月。コロナ対策にもずいぶんと馴れてはきたものの、三密にともなう制約が多く、不便なことこの上ない。またGOTOトラベル等はあっても、正直なところ遠出する気にもなかなか来れずにきた。

そんな中、遠出に代えて11月初旬に1泊で東京都奥多摩にある御岳山に。午後自宅を出発、徒歩で山を登り、夕方近くに御嶽神社そばの宿に着いたが、宿の主人が言うには、今年例年になく人出だという。部屋はあってもコロナ対策で宿泊人数を半分以下に抑えているため、宿泊の予約を取れない人も多いと言う。遠出ができない分、近くの穴場に人が殺到しているというわけだ。

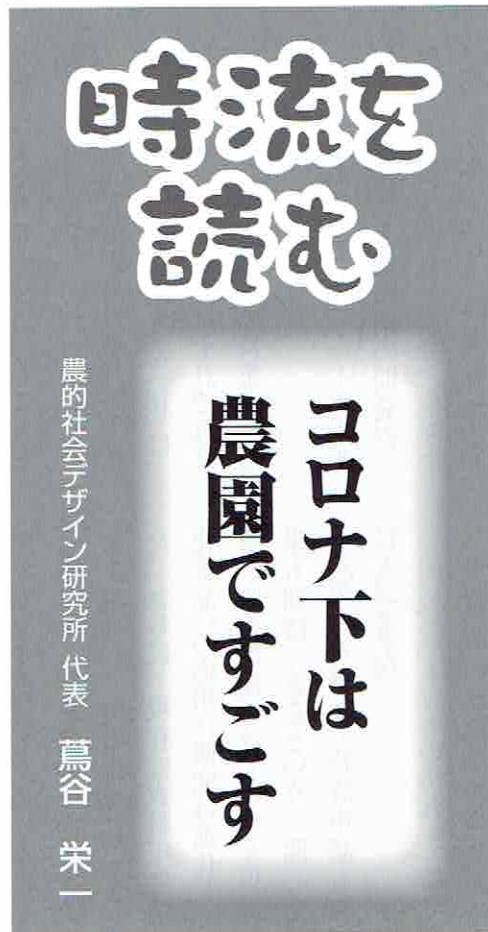
コロナの影響でマイナス面ばかり強調されるが、その影響は一律ではなく、所により、やり方により、区々であることを物語る。

家族で楽しむ農園

農業の世界にも同様の構図が見られる。外食需要の縮小で販路確保に困窮している農家が多いことは事実であるが、そればかりでもない。我が家を月1回開放して、つ

来たとのこと。

清水農園は中央線武蔵境駅から北西に徒歩10分弱、玉川上水近くにあり、周辺は学校や保育園、住宅が多く、農地面積20アールほどの典型的な都市農家である。清水農園は農産物の直売もする



たやさんち〴〵なる2時間ほどご近所や友人が集まっておしゃべりする会を設けているが、この会の常連である清水農園の清水茂さんの話。コロナのおかげで忙しさが増し、この日も来客への対応に追われて昼飯もとれないままここに

が、いわゆる産直小屋を作ったの販売はなく、契約しての取り置き、もしくはお届け販売となる。これに加えて来園し自分で収穫して持ち帰る人、さらに収穫した大根を清水農園の作業小屋でたくあんに漬け、後日、漬け上がったものを

購入していく人が増えているとか。身近にある農園で、太陽の下で土に触れ、収穫等農作業をしたり、昼食をとりながら家族ですごく消費者が出現している。特にコロナ発生以降、こうした動きが顕著で、農園は賑わいを増しているという。

「生産消費者」への流れ

こうした農業展開が広がればと思うが、実はこうした展開の下地には、父親から農業をパトנטアツチして40年近くにわたる有機農業への取り組みと、近隣の小学校や保育園等の生徒や園児たちに農業体験の場を長年提供してきた積み重ねがある。一朝一夕で、生産・販売型の農業を超えて体験交流型の農業を展開していくことが容易ではないことも確かではある。

コロナへの対応を通じて、あらためて都市農業にとどまらず農業全般について、あり方の見直しを求められていることは間違いない。時代は単なる消費者ではなく「生産消費者」に向かって流れを加速しようとしているように見える。